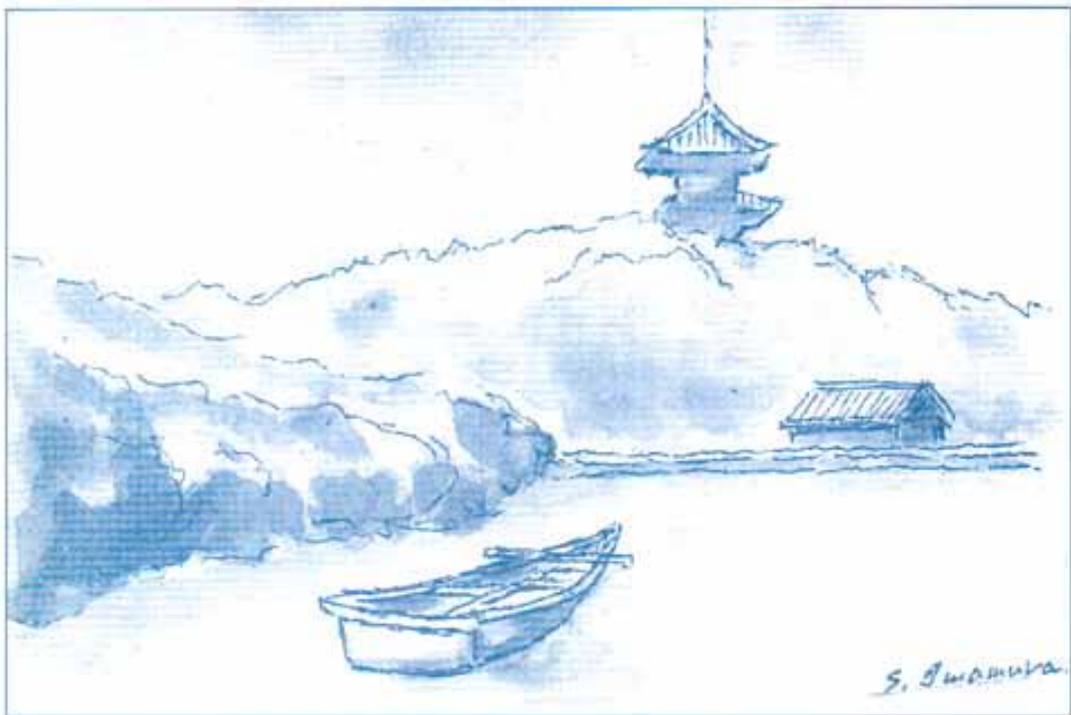


末黒野

すぐろの



6月号

(通巻898号)

金縷梅

森清堯

小綬鶏や原稿の締め思ひ詰め
金縷梅や笑ひの洩るる作業小屋
能舞台へつづく小道や花櫛
日の移る谷戸の奥処や梅真白
うすうすと生るる影や芽吹山
身支度の肩の軋みや凍返る
土佐水木池の向かうの花頭窓
歩に適ふ池渡る石水温む
蝌蚪の紐堰の柵解け初め
芽柳や濠に群れたる魚の影
草の芽や畦の土塊押し上げて
開拓碑へ数の影おき花木五倍子

瑞声

夫婦雛

黒滝志麻子
(顧問)

人形を叱る幼子木の芽晴
金色の鴟尾を木の間には芽吹き山
木の家の木の香の親し夫婦雛
頤のゆたかなる雛並びをり
海風や香を散りばむる黄水仙
大寺の鐘や岬の春動く
飾るだけ飾りて子犬春の園
早春の句を携へて逝かれしや

悼 恵庭恵子様

甲矢集

配列は音順（月毎の循環）



春北風

菅野日出子

浅春や菩提寺いかに夜半の地震
碑の寺の由来や梅日和
小綬鶏の声を追ひ行く寺の坂
竹林の覆ふ鐘楼春北風
地球儀の日本の小さし鳥雲に
囀や大樹の覆ふ法の庭
外出の禁止いつまで梅の散る
目に見えぬものに怯えて二月尽
啓蟄や耳搔きさがす小引出
花便り聞きつつ籠るはかなさよ

白梅

田中臥石

桃の花匂ひけり妻退院す
並水仙すつくと予後の夫婦かな
白梅や痩せて浮き出す肋骨
家族葬決めてをりけり梅真白
智恵子棲む家の跡地や梅花林
千鳥啼く智恵子歩きし真亀川
妻山髪美しきかな遠初音
棚経や彼岸の空を鷺流れ
海ひびく彼岸の墓地や鷺のこゑ
彼岸過ぎ海は時化なり九十九灘

今さら

森清信子

岬鼻の潮風荒き木の芽かな
つい座る園の大石犬ふぐり
林泉の立ち去り難し枝垂梅
今さらに帰らぬ若さ花きぶし
弔ひの叶はぬ疫病春寒し
恋猫や出かけてみたき繁華街
霾や列島海に囲まれて
青空へやあと首出しくしんぼ
手品師の話術に惑ひ春の宵
春光やパッチワークの針進め

春 炉

石黒興兵

寒釣や水のきしみに耳聴く
寄る人の皆手をかざす春炉かな
一筋のひかりの帯や雪解川
水音や山里春を小刻みに
金縷梅や蔵の高窓両開き
春くや山茱萸色を重くして
乾裂けてなほ白梅の気概かな
漁火のふくらみゆらぐ朧かな
遠流の地なれば梅の香高からむ
恋猫の泳ぐ目何も見てをらぬ

落 椿

岡野里子

池の面の微塵のひかり猫柳
半眼の露坐のみ仏春の風
音高き流れの修羅や落椿
風の子の耳まで赤し梅真白
ブルーシート覆ふ砂場や春寒く
大池に犇めく鯉や露のたう
豪農の亭支柱や冴返る
雲走り白波走り春一番
首伸べて甲羅干す亀山笑ふ
雲被く丘の祖師像風光る

乙 矢 集

配列は音順、月毎の循環



引 鳥 齊藤マキ子

初虹を見しことけふの余得とす
ゆらゆらと酔つてゐるかに奴風
靴跡の上に靴跡春の泥
潮騒のおよぶ小径や落椿
明日は引く鳥か羽音を重ね合ひ
囀りの降り止まぬなり極楽寺
裏畑に葱の花咲く駐在所

臥 竜 梅 加藤静江

群青の空の深さや臥竜梅
命籠め白一輪の臥竜梅
浮舟のかすかなる揺れ春の鴨
水平線空と解け合ひ春日和
せせらぎの音の清かや枝垂梅
満ち始む汽水の池の初燕
明るさや芽吹き of 山へ一輛車

春 障 子 堺 昌子

早春賦歌ひ少年卒業す
春障子水かげろふを躍らせて
あま色の髪 of 青年青き踏む
飛び石を伝ひゆく春惜しみけり
菩提寺の池にくり出し菖蒲の芽
公園に児等の声増し八重桜
色たがへ公園そめてチューリップ

初花 高木邦雄

鴨引きて広ぐる沼の黙深し
一両車花を照らして闇に去り
初花や暮六つ長き深大寺
花菜畑沖のはるかの一つ星
淡き日の透くる水底蜷の道
篋の風凧ぐ暮れの初音かな
湖臨む古城の天守風光る

風の声 長尾タイ

下萌や野面に歌ふ風の声
風走る少女も走る花の下
落椿夫のイニシャル並べをり
蜷の道途切れさうなる老の道
針に糸睡魔の絡む春の午後
心乗せ歩幅合はすや花筏
残る鴨寂と一羽の羽繕ひ

霞 今村千年

波音の海岸通り夕霞
江ノ電は波音ばかり春霞
子ら駆けて野原は春の色となる
孫を褒め三毛猫褒めてうらけし
杯に桜薬ふる御室かな
紅しだれ築百年の京格子
老桜むかしはここに分教場

舫ひ舟 大川暉美

馥郁とミモザの花や抱く光
磴百や一歩一歩へ春の風
春風のリズムにのるや舫ひ舟
春茜見つめ浜辺の牧水碑
春光や川に影おく魚の群
見霽かす安房の白波花菜東風
潮風にこぞり伸ぶるや松の芯

雛 太田良一

検温の玄関口や雛飾る
木遣唄の流す木材春の川
開発の山の麓や卒業歌
囀を拾ふ補聴器探しけり
春の夜や未読の本を積み重ね
山畑へ寄する潮風春の色
語部を囲む座敷や雛の間

待針 小田嶋野笛

待ち人は来ずと神籤や春来たる
きさらぎの月まるまると小夜の窓
初七日の膳の天麩羅ふきのたう
子の家と一駅離れ嫁菜飯
笑み給ふ今宵の雛やえやみの世
春服を縫ふや待針花のやう
開花日や先づ薫の咲き出でて

夕東風 岡田史女

鐘の音の入江越えきぬお中日
ベル押して待つ渡船場や風光る
船べりを叩きぬ春の波しづき
半島のけふ良く見ゆる春日和
ものの芽や売却決めし家屋敷
をとうとの満中陰の初音かな
夕東風や骨格さらす帆船に



青炎集

森清 堯選

狭山 沼崎千枝

啓蟄や子規の遊びし野球場
襟足の美しき女将や若布和
菲摘めば厨はまるで中華街
アメ横の濁声あふれ白子干
生え変はる子の歯を天へ花杏
ひらがなのなまえかけたね桃の花

横浜 長尾良子

横浜 赤塚篤子

何時までも夜半に泣き交ひ猫の恋
春めきぬ橋より見ゆる鯉の群
ひな祭嬬華やぐ乙女顔
啓蟄や散歩の犬も鼻こすり
お水取り終はりて風の緩びけり
遠目にも街路の桜色付きぬ

横浜 荒井貞子

横浜 渡辺美智子

母の忌の墓前に行けず寒椿
風尖り風の乾きて余寒なほ
寒暖の大き差惑ふおぼろ月
梅が香の光こぼるる上枝かな
露の臺温もりのまま仏前に
庭の梅心を込めて玻璃戸拭く

廃屋の白梅の香や悼むかに
恋猫に移し欠伸の収まりぬ
芹摘みの手首に早き流れかな
佇みて春の音聴く渚かな
春の色纏ふマネキン長き首
敗者には敗者の誇り春の虹

藤沢 宮澤靖子

横浜 和田慈子

うぐひす嬢の告ぐる迷子や梅見茶屋
噛み跡の残る鉛筆受験の子
啓蟄や雑木林に人の影
涅槃西風長き尾を引く劬斗雲
春光や山野ふくらむ気配して
散るまでは桜の駅と呼ばれけり

大きくさめ手袋までも洗ひけり
痛み出す自慢の皓齒四温晴
飛梅の凜と宮居の風の中
春寒し夫と連れ立つ医師の前
霾ぐもり覚え切れざる葉の名
象の形みるみる崩れ春の雲

横浜 大内由紀

横浜 六崎正善

巡りくる誕生月や花ミモザ
山里の無人販売花辛夷
サイネリアのうすもも色や朝日差し
我庭は野鳥のカフエや春日影
びいびいと鳴き真似からす春の昼
月面の裏いかやうや夜半の春

露味噌や信濃は古き水の里
摘草や海峡渡る定期船
潮風とたはむる母子しやぼん玉
古寺の布袋が像や花椿
剪定の背や全き富士の峰
薬や風の向かうに光る海

横浜 山口郁子

横浜 小林清子

木洩れ日や春蘭の花萼を解き
のびやかなる鶯の音のビブラート
命日の墓前の和む初音かな
水温む園児手を打ち鯉呼べり
宇宙船春あけぼのの空よぎり
春の塵辻の地蔵の細眼

節分や狛の揃ひの口覆ひ
花柄の二重マスクや街は春
竹やぶに入り竹やぶ出づる初音かな
花ミモザ昨日の火事の匂ひかな
今週の天気予報や菜種梅雨
春泥に馬の足あとハロン棒

耕 土 集

岡野 里子



茅葺に幾代重ねて御堂春
鶯の声に静もる里の森
萌黄なるシテの装束松の花
下総に常陸の飛び地春の川
早春の人なき陸上競技場

印西 大坂 正

若布汁朝餉の卓の椅子二つ
梅咲くや白髪まじりの夫の眉
うららかや潮入川に鷗群れ
寄り合ひて水掻き忙し春の鴨
白梅の散り込む川面暮れ残り

横浜 小原 紀子

ふぐ鍋や海峡通る貨物船
雪しづか行き先なぞる阿弥陀籤
手になじむ米の研ぎ水寒の明
寒明や一の鳥居を濡らす雨
水底の動く小石や二月尽

横浜 松川 昌義

啓蟄や籠りに厭くる人の群
もの芽や目覚めの声を屈み聞く
薬や球児の声の餅して
老梅の花を無心と思ひけり
開帳や夕暮までも人絶えず

横浜 喜田 君江

葉牡丹の芯に水滴日のおふれ
啄める萌黄の鳥や薄紅梅
人声や雪間ひろがる尾瀬の森
初黄蝶の横断歩道迷ひ来て
薬師堂の三楹の花薄明かり

横浜 村田 敦子

余生てふ彩を纏ひて椿落つ
春寒の厨へケトル湯気を吐く
さ緑の拳を擡ぐ露のたふ
鉄塔の柵をとりでやつくしんぼ
音無しの信号青や朧影

横浜 市川 夏子

白壁に映ゆる紅梅東慶寺
白梅の老幹うねり尼の寺
春一番絵馬かたかたと走るごと
うしほ汁香りをゆたに雛祭
古民家の明るしつるし雛飾り

横浜 津野 桂子

春寒や服用ふゆる常備薬
あたたかや医の待合のオルゴール
六地藏へ片合掌や黄水仙
校門の三色堇二列なり
支払ひは電子マネーや桜餅

横浜 大庭美智代

野に摘みて夕餉の椀や日脚伸ぶ
軽トラの荷台を囲み買ふ春菜
不意を打つ夜半の地震や冴返る
ありがとう言へて卒業茶髪の子
袖口をぐーで拵げて四月入り

横浜 小池 桃代

石垣の小さき鱗割れすみれ草
番鳥梅の香あびて日を浴びて
草萌や百の階のぼり切り
碑を抱きて草の萌えにけり
雲脚の早きをくぐり月朧

横浜 秋山 文子

シーグラス濯ぐ春潮材木座
春月や釣り座を囲む居つき猫
原酒着く酒菜は旬の露の臺
引き連れて句材溢るる春野道
疫病禍のマスクの句会風光る

横浜 伊藤 鴉

引越して囀りの声変はりけり
オリンピア精神問はる春の月
平安の香り確かむ沈丁花
かんしや状ママへと綴る卒園児
灯り消しリモートに見るお水取

川崎 木村 純子

煮返へして昨夜のおでん昼餉とす
老いて知る花待つ心西行恋
あたふたと過ごせし日々や山笑ふ
万葉の色もかくやとすみれ草
記念樹の母校の桜咲き初むる

横浜 杉山 善信

春灯やぼつくりの音響く路地
ジャズピアノ聴くキャンパスや春夕べ
菜の花の苦み味はふ幼かな
町内の囲碁教室や葦咲く
春の星病感ぜぬアナウンサー

横浜 久島しんの